

声に出して読む万葉集 第四十六回

叙景歌人 山部赤人 其の三

卷六 雜歌（つづき）

九四二

〔題詞〕 辛荷の嶋を過ぐる時に、山部宿祢赤人の作れる歌一首「并短歌」

〔原文〕 味澤相妹目不數見而 敷細乃枕毛不巻 櫻皮纏作流舟二 真楫貫 吾榜來者 淡路乃野
嶋毛過伊奈美嬬 辛荷乃嶋之嶋際従吾宅乎見者 青山乃曾許十方不見 白雲毛 千重尔成來
沼許伎多武流 浦乃盡往隱 嶋乃崎々 隅毛不置 憶曾吾來 客乃氣長弥

〔訓讀〕 あぢさはふ妹が目離れて 敷榜の枕もまかず 桜皮巻き作れる船に 真楫貫き 我が漕
ぎ来れば 淡路の野島も過ぎ 印南嬬 辛荷の島の島の際ゆ 我家を見れば 青山のそことも
見えず 白雲も千重になり来ぬ 潛ぎ廻むる浦のことゞと行き隠る島の崎々 隅も置かず

思ひぞ我が来る旅の日長み

▽語釈

辛荷の島＝兵庫県揖保郡御津町の沖合の唐荷三島。播磨国風土記に、韓人の船が難破し、その荷物が漂着したので「韓荷島」というとある。

あぢさはふ＝「妹が目」にかかる枕詞。アヂガモが夜昼網の目にかかると言うが、未詳。

桜皮＝樹皮を舟など物に巻いて補強するために用いる植物。カバノキ科のシラカバ。

伊奈美嬬＝兵庫県高砂市の加古川河口付近の地。『播磨国風土記』に妻が隠れたという伝説を持つ。

隈も置かず＝曲がり角ごとに。

九四三 反歌

〔原文〕 玉藻荔 辛荷乃嶋尔 嶋廻為流 水鳥二四毛有哉 家不念有六

〔訓讀〕 玉藻刈る唐荷の島に島廻する鵜にしもあれや家思はずあらむ

九四四

〔原文〕 嶋隱 吾榜來者 乏毳 倭邊上 真熊野之船

〔訓読〕 島隱りしまがく 我が漕ぎ來れば羨くわしだも大和ともへ上のぼるま熊野くまのの船

島隱りしまがく 島蔭に隱れる。
ま熊野の船くまの 島蔭に隱れる。

▽語釈

九四五

〔原文〕 風吹者 浪可將立跡 同候尔 都太乃細江尔 浦隱居

〔訓読〕 風吹けば波か立たむとさもらひに都太つだの細江ほそえに浦隱り居り

▽語釈

さもらひサマラヒ = サは接頭語。モラヒは、見守る意の動詞モリに反復・継続の接尾語ヒのついた形。様子を伺いながら機を待つ。人に仕え、また、風波の静まるのを待ち、あるいは恋人に会う折を待つさまなどにいう。

都太の細江つだのほそえ = 姫路市飾磨区の飾磨川河口。

浦隱りほらこり = 「浦」は湾曲して陸地に入り込んだ所。

九四六

題詞みぬめ 敏馬の浦を過ぐる時に、山部宿祢赤人の作れる歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 御食向 淡路乃嶋二 直向 三犬女乃浦能 奥部庭 深海松採 浦廻庭 名告藻苅 深見流乃
見卷欲跡 莫告藻之 己名惜三間使裳 不遣而吾者 生友奈重二

〔訓説〕 御食向ふ 淡路の島に直向ふ 敏馬の浦の 沖辺には 深海松採り 浦廻には なのりそ刈
る 深海松の 見まく欲しけど なのりその おのが名惜しみ 間使も 遣らずて 我れは 生けり
ともなし

▽語釈

御食向ふミサカマフ = 淡路にかかる枕詞。食膳の食物が向かい合つていて、その中にあぢ（トモエガモ）・

栗・葱・蟻アリなどがあることから、同音を持つ地名にかかる。

深海松シマガマ = 海の深い所に生えている海松。

間使ひミケ = 二人の間を行き来して言葉を伝える使。

九四七 反歌

〔原文〕 為間乃海人之 塩燒衣乃 奈礼名者香 一日母君乎 忘而將念

〔訓説〕 須磨の海あま女の塩燒キヌ衣の慣れなばか 一日も君を忘れて思はむ

▽語釈

慣れヒトヒ = 着物が古びてよれよれになる。

〔左注〕 右は作歌の年月未だ詳らかならず。但し類を以ての故に、この次に載せたり。

一〇〇一

〔題詞〕（春三月、難波宮に幸しし時の歌六首）

〔原文〕 大夫者 御猶尔立之 未通女等者 赤裳須素引 清濱備乎

〔訓読〕 大夫は御狩に立たし娘子らは赤裳裾引く清き浜びを

〔左注〕 右一首、山部宿祢赤人作。

一〇〇五

〔題詞〕 八年丙子夏六月幸于芳野離宮之時山邊宿祢赤人應詔作歌一首「并短歌」

〔原文〕 八隅知之 我大王之 見給 芳野宮者 山高 雲曾輕引 河速弥 濁之聲曾清寸 神佐備而見
者貴久 宜名倍 見者清之 此山乃 盡者耳社 此河乃 絶者耳社 百師紀能 大宮所 止時裳有目

〔訓読〕 やすみしし 我が大君の 見したまふ 吉野の宮は 山高み 雲ぞたなびく 川早み瀬の音おと

ぞ清き 神さびて 見れば 貴く よろしなへ 見ればさやけし この山の 尽きばのみこそ この
川の 絶え巴のみこそ ももしきの 大宮所 やむ時もあらめ

▽語釈

よろしなへ||ナへは助詞。心を寄せるとともに。心を寄ると同時に。

一〇〇六 反歌

〔原文〕 自神代 芳野宮尔 蟻通 高所知者 山河平吉三

〔訓読〕 神代より吉野の宮にあり通ひ高知らせるは山川をよみ

▽語釈

高知り||立派に治める。

卷八 春雜歌

一四二四

〔題詞〕 山部宿祢赤人歌四首

〔原文〕 春野尔 須美礼採尔等 来師吾曾 野乎奈都可之美 一夜宿二来

〔訓読〕 春の野にすみれ摘みにと來し我れぞ野をなつかしみ一夜寝ひとよねにける

一四二五

〔原文〕 足比奇乃 山櫻花 日並而 如是開有者 甚戀目夜裳

〔訓読〕あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらばいたく恋ひめやも

一四二一六

〔原文〕吾勢子尔令見常念之梅花其十方不所見雪乃零有者

〔訓読〕我が背子に見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪の降れば

一四二一七

〔原文〕従明日者春菜将採跡標之野尔昨日毛今日母雪波布利管

〔訓読〕明日よりは春菜摘まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつ

一四三一

〔題詞〕山部宿祢赤人歌一首

〔原文〕百濟野乃芽古枝尔待春跡居之鳶鳴尔鷦鷯鷯

〔訓読〕百濟野の萩の古枝ふるえに春待つと居りし鳶鳴きにけむかも

卷八 夏雜歌

一四七一

〔題詞〕山部宿祢赤人歌一首

〔原文〕戀之家婆形見尔將為跡吾屋戸尔殖之藤浪今開尔家里

〔訓読〕恋しけば形見にせむと我がやどに植ゑし藤波今咲きにけり

卷十七 (部立せず)

三九一五

〔題詞〕山部宿祢明人、春鳶うぐひすを詠める歌一首

〔原文〕安之比奇能山谷古延氏野豆加佐尔今者鳴良武宇具比須乃許惠

〔訓読〕あしひきの山谷越えて野づかさに今は鳴くらむ鳶の声

▽語釈

野づかさ＝ツカサは塚のように高い所。野の小高くなつた所。

〔左注〕右は、年月所處、未だ詳審なることを得ず。但、聞きし時のまにまにここに記し載す。